

# 戦後那覇の都市化と地名の生成に関する地理学的研究

加藤政洋・河角龍典・櫻澤誠

## I はじめに

周知のように地上戦を経た戦後の沖縄では、米軍がニミッツ布告を適用して住民を日本の行政から切り離し、独自の支配体制を築いていった。結果として1950年を前後する時期から、米軍統治下という特異な状況のもとで土地の接収ならびに軍事基地の建設が進められると同時に、部分的かつ段階的に開放された土地を利用して、都市の再建ないし建設が行なわれゆくところとなる。その過程で自然発生的に市街地が形成された一方、地権者が組合をつくって区画整理を行ない、新しいまちづくりを推進する例も見られたほか、米軍の指導下で民政府（あるいは各自治体）が都市計画を行ない、計画的に市街地を開発することもあった。

日本本土における戦後の都市復興とは異なり、米軍の土地占有の影響が全面的に及んだ那覇では、戦前の旧市街地から離れた農村部に新しい市街地が形成され、しかも商業に特化するかたちで急激な都市化が進行していく（後述）。その結果、戦後の日本にあっては類を見ない都市空間が出現し、その空間構造は現在にいたるまで都市の骨格を枠づけている。

注目されるのは、この急激な都市化の過程で形成された街路・街区に対し、次から次へと新しい名称が付与されて人口に膾炙し、その多くが現在まで残る地名（通称を含む）として定着したことである。例を挙げるならば、那覇市の目抜き通りとして知られる「国際通り」は、市街地化の最初期に立地した映画館「アーニーパイル国際劇場」の名にちなむものであるし（現在は正式な名称）、あるいは開業医の病院が集積する街路は（正式な名称でないものの）ひろく市民の間で「病院通り」と呼ばれるなど、戦後に発生した地名は枚挙にいとまがない。

実のところ、大正8（1919）年測図以降、約50年間のブランクにおいて本土復帰後の昭和49（1974）年に発行された那覇市の市域を含む地形図（2万5千分の1）には、そのような当時はまだ通称であった地名（<sup>かんざとぼろ</sup>神里原）も採録されるなど、新しい地名の分布には大変興味ぶかい布置構成が観取される。逆に言えば、戦後に登場した数々の地名は、都市形成の歴史地理を象る記号の星座であるとも言えるかもしれない。

以上の点を踏まえつつ、本研究では、戦後那覇の市街地形成とともに発生した地名を概観し、それらを都市化の歴史地理に定位することで、地名の生成原理の一端を解き明かしてみたいと思う。

本論に入る前に、研究の前提について簡単に触れておく。1974年の本土復帰後初となる地形図（2万5千分の1）をベースにして、まず戦後の都市化の過程で形成された市街地の範囲を把握した上で、旧来の町名や字名に由来する住居表示上の町名を除いた地名／街路名をゼンリンの『住宅地図』（那覇市東部1983年＋那覇市西部1982年）から抜き出した。旧首里市・旧小禄村を除いた範囲の主たる街路名は、以下の通りである。

又吉通り（県道40号線）、儀保大通り、なかよし通り、沖映通り、国際（大）通り、市

場本通り、肉市場通り、平和通り、桜坂中通り、グランドオリオン通り、竜宮通り、やなぎ通り、ひめゆり通り（国道 330 号線）、安里橋大通り、栄町通り、大道大通り、赤マルソウ通り、崎山通り、浮島通り、開南中央通り、新天地通り、大平通り、開南本通り、新栄通り、神原大通り、大丸横丁、日野通り、喜多通り、真和志大通り、那覇病院通り、与儀市場通り、与儀大通り、古波蔵大通り、国場大通り、若狭大通り、上之蔵大通り、久米大通り、一銀通り、ニューパラダイス通り、松尾消防署通り、市役所裏通り、上泉通り、壺川大通り、刑務所どおり

国際（大）通り、平和通り、沖映通り、市場本通り、グランドオリオン通り、浮島通り一銀通り、ニューパラダイス通りなど、中心市街地の街路は当然のことながら含まれているが、一見して明らかなのは、字名や町名など、旧来の地名に由来する名称——「古波蔵大通り、国場大通り、若狭大通り、上之蔵大通り、久米大通り」など——にまじって、施設名に由来する街路名が存在することである。直截的な表記としては、「那覇病院通り、松尾消防署通り、市役所裏通り、刑務所どおり」などがあるし、「新天地通り」や「肉市場通り」は、それぞれ市場にちなんだ街路名である。なかには、「日野通り、喜多通り、竜宮通り」など、地図と名称からだけでは由来の不明な街路も含まれるが、地図上の表記から判断するかぎり、戦後那覇における地名（街路名）の生成は、二つに大別できそうである。すなわち、1953 年 9 月に市長在任中に急逝した又吉康和を顕彰した「又吉道路」を例外として、その他はほぼ旧来の地名か、あるいは戦後新たに登場した施設に由来する街路名であるということだ。

この点を踏まえ、本研究では、以下Ⅱで市街地の形成を概略した上で商業地を中心に立地した施設に着目し、Ⅲでは商業集積の様態と街路名の生成について検討をくわえ、そしてⅣでは生成の契機を整理し、現状を概観する。

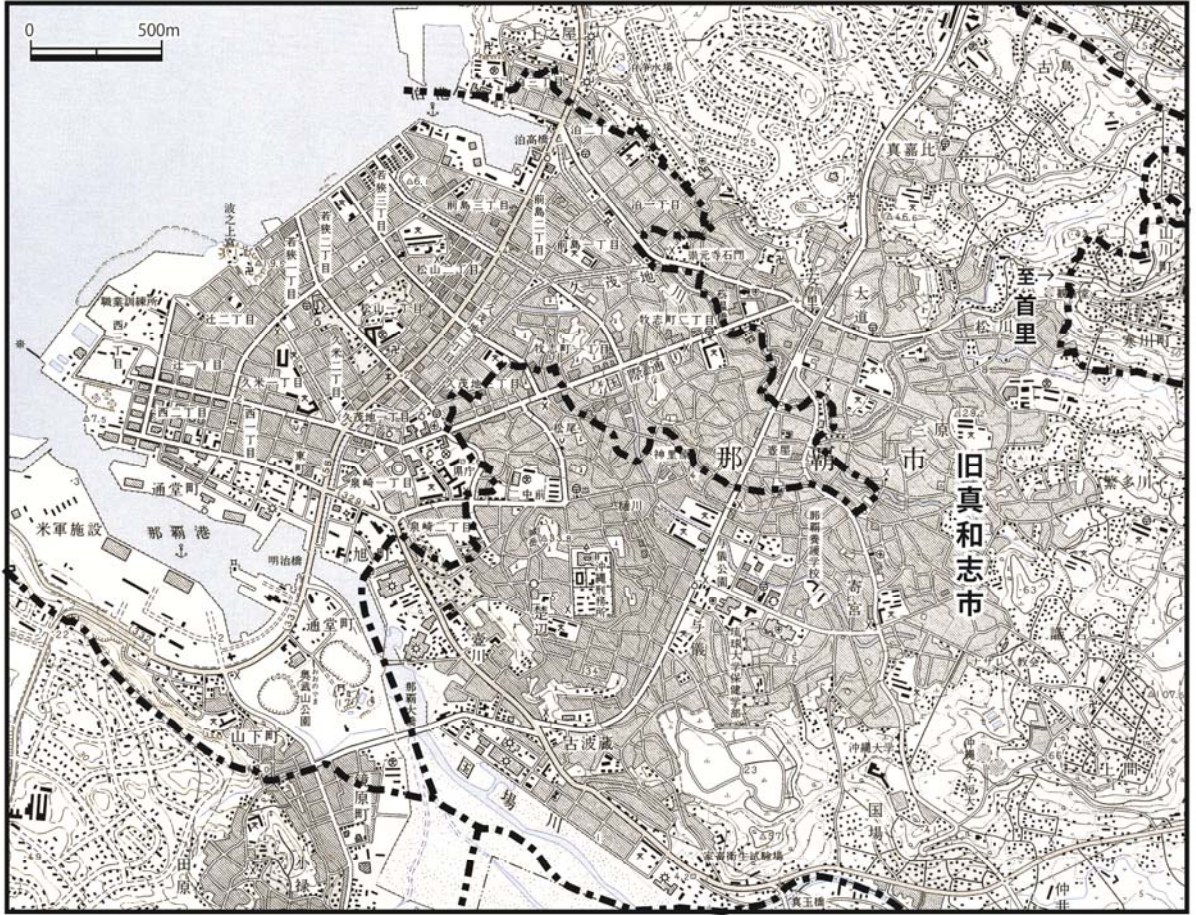
## Ⅱ 戦後那覇の市街地形成

### （1）市街地の対照性

沖縄島の南部に位置する那覇市は、太平洋戦争末期の激しい地上戦を経て、戦後、米軍占領下琉球の首都として、総体的な領有状態から部分的かつ段階的に土地の開放が進むのにあわせて急激な市街地化を経験した都市である。米軍の統治という特異な条件のもと、戦前を上回る人口の移入とともに形成された市街地には、なかば自然発生的に市場ができ、部分的な計画をとともなう開発によって劇場（映画館）を核とした飲食関連サービス業の集積する歓楽街が随所に誕生した。こうして戦後の那覇は、住宅地と商業地とが空間的モザイクをなす一大消費都市となったのである。

まず第 1 図を参照してみたい。下図は 1920 年、上図は 1974 年発行の 25,000 分の 1 地形図で、戦前・戦後の市街地の拡がりを比較することができる。両図ともに旧行政界を破線で示し、1920 年発行の地形図には、戦後に那覇の目抜き通りとなる国際通りの位置を太線で示しておいた。



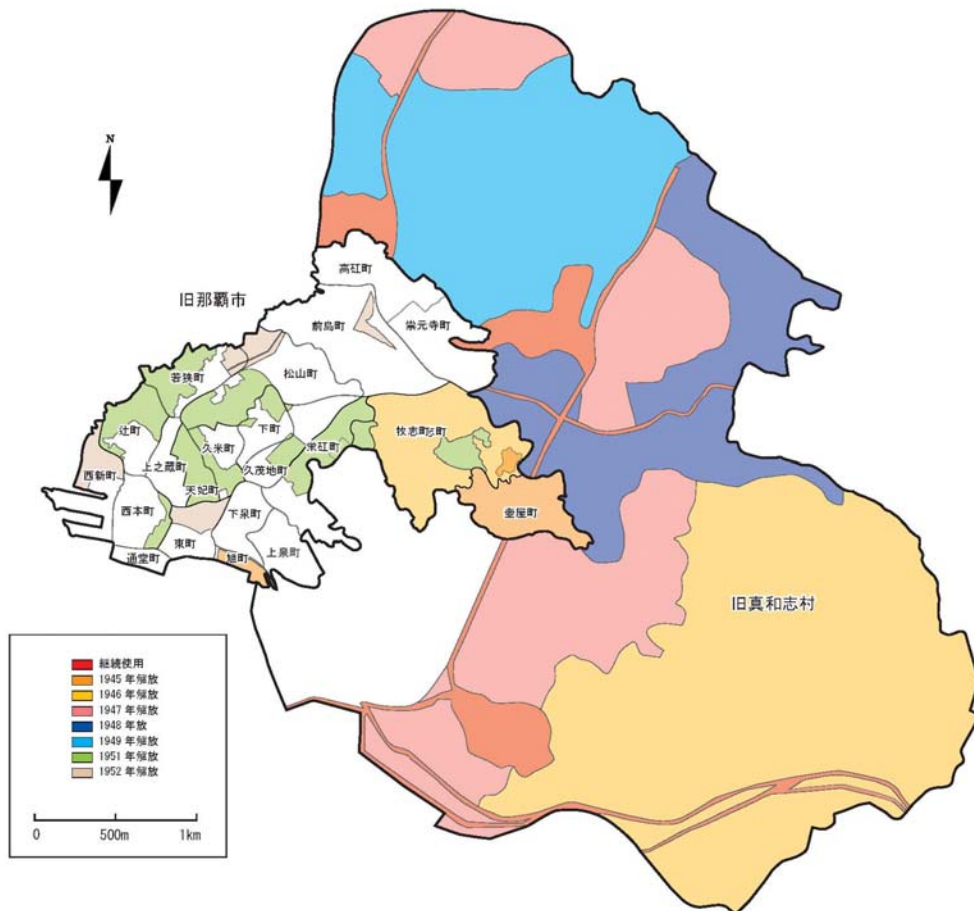


第 1 図



この二枚の地形図から明らかなおり、戦後の那覇は戦前をはるかに上回る市街地の拡がりを有している。しかも、中心的な商業地区は、臨海部に位置した旧の市街地を遠く離れ、旧真和志村（市）の低地部を含む、かつての近郊農村へと空間的に移動していた。国際通りの位置性は、このことを如実に物語っている。

第1図に続いて第2図を参照してみたい。この図は、米軍による土地開放を年次別に図示したもので、段階的かつ野放図な開放のあり方を視覚的に把握することができる。開放のタイミングによって空間化される差異が、戦後那覇の市街地形成に多大な影響を及ぼしたことは想像に難くない。



第2図

総じて言えるのは、近郊がいちはやく開放されたのに対し、旧市街地側が遅れたということであるのだが、この対照性が空間形態に反映されるのである。すなわち、おおよそ久茂地川を挟んだ西側（旧市街地側）は、開放のタイミングが遅れたために、区画整理事業の実施が可能となり、整然とした街区が誕生した。逆に東側は、国際通りを越えて首里のふもとへ達するほどに、スプロールした街区が分厚く展開する。

次の新聞記事は、戦後における初期市街地形成の一般的傾向を示していると言えよう。

「畠消えて『街』に変わる」

人足まれな田んぼや畠にどつと家を建て、ひしめき合った戦後の那覇市街が神里原にふくれて真和志村と軒を連ね、更に真和志野の大原、三原、大道、松川に続いて、目と鼻の間にある首里市寒川区の下に新しい屋根が一つ、二つ、三つ、あと数百米首里市金

城町の住宅地につながってしまう。

〔三原周辺は〕こうして畠変じて住宅地となり雑貨店が約十軒〔、〕飲食店もできた。

（『沖縄タイムス』1952年5月21日）

このようなスプロール地区の空間形態が、後に作家の島尾敏雄をして那覇を「迷宮都市」と言わしめることになるのだった。

他方、土地の開放が遅れた久茂地川右岸においては、「土地区画整理事業は都市計画の母」という語りを地でゆくがごとく、区画整理事業が全面的に施行され、あわせて用途規制も敷かれたことから、現在につらなる実に対照的な市街地景観が誕生したのである。これもまた、米軍の占領・統治下における都市空間形成の帰結のひとつと言えるだろう。

## （2）「一銀通り」の開通

新旧市街地の対照性について、ここでは街路名の生成とも関わる事例をひとつ挙げておきたい。

1958年3月5日、那覇市の中心部を貫通する一本の幹線道路が開通した。国際通りから久茂地小学校の横を抜け、久茂地橋、そして旧軍道1号線（現国道58号線）を経て、卸問屋街の若松通りへと至るルートである。1953年の都市計画法を那覇市に適用した際に設定された全長2,167㍎の街路で、幅員は当時としては高規格の13㍎であった。この街路の開通を報じる記事を、少し長くなるが引用しておきたい。

「新旧市街を結ぶ 那覇の“一銀通り”」

那覇市国際中央通りと旧市街の若松通りを結ぶ都市計画幹線道路“一銀通り”（国際中央通り第一相互銀行横から久茂地橋、一号線を経て若松へ）は、去る五日開通した。

戦後那覇市への異動〔移動〕は、楚辺、壺川、松尾一帯のいわゆる旧港村から、牧志、壺屋一帯に限られたために、商店街は牧志を中心に発展して、旧市街地は置き去りになり〔、〕開放になっても、これを結ぶ道路が安里から泊を経ていくのと、政府前から久茂地を経ていく（大回り）の二本しかないために、旧市街地の復興は立ちおけていた。

それで新旧両市街を結ぶ道路の新設はかなり前から市民の要望となっていたが、この道路の完成で両市街の距離は、ぐっとちぢまっただけでなく、あふれる国際通りの交通量も緩和される。

今では、若松通りの問屋から市中の各商店への商品を運ぶトラックや、タクシーがひっきりなしに通っており、市都計課ではさらに区画整理がすすんでいながら、移動のおくっている旧市街への移動が促進され、牧志一帯のごみごみした密集地の緩和にも役立つだろうと語っている。（『沖縄タイムス』1958年3月10日）

この記事によると、戦後の那覇市への人口移動は、当初、壺屋や牧志の一帯に限られていた。そのため、那覇四町（東・西・若狭・泉崎）と称された旧市街地を「置き去り」にするかたちで、牧志を中心に商業地が発展する。ところが、旧市街地が開放された後も、安里から泊を経由するか、あるいは政府前から久茂地を経て行くほかはなく、いずれも大回りをしなければならないため、旧市街地の復興はなかなか進まずにいた。そこで、新旧

の市街地を結ぶ必要性から、貫通する道路が開発されたというわけだ。

新道路の開通に合わせて名称を公募したところ、久茂地と若松からそれぞれ一字ずつをとった「久松通り」や「久茂地橋通り」などと地名にちなむもの、あるいは「ときわ通り」や「あけぼの通り」のように慶賀する名も候補にのぼっていた。それらの中から選ばれたのは、起点となる国際通りに立地していた第一相互銀行にちなむ、その名も「一銀通り」にほかならない。

記事中にある「若松通り」は、約 60 軒の卸売店（当時は商社と呼ばれた）が建ち並ぶ、計画的に開発された卸商店街であった（1956年11月4日開業）。新市街地における「商店街」の発展、すなわち旧市街地を「置き去り」にするかたちで市場・商店街を核とした商業地区が形成されていたものの、遅れて開放され、なおかつ区画整理された街区に卸商という都市機能が充填された結果、新／旧の市街地を結ぶ街路の開通が待望されたのだ。

実際、「一銀通り」の開通に寄って「……両市街の距離は、ぐっとちぢまった……」とされるように、効率的な流通／交通を担保する建造環境を生産することで、新旧市街地の時間距離は確実に短縮されたのである。結果、若松通りの卸商から各商店への配送が効率的になること、国際通りの交通量が緩和されること、さらには旧市街地への人口移動が促されて、新市街地の「ごみごみした密集地」が解消されることまで予想されたのである。そして、その主役たる一銀通りは、そう遠くない未来に商店街になるだろうと、期待をもって語られていた。

空間的想像力にもとづく未来予想図が言葉どおりに実現することはなかったけれども、リヴァース性を刻印された戦後那覇の都市空間を物語るひとつのエピソードと言えよう。

以上のような都市化の地理歴史的コンテクストを踏まえ、Ⅲでは新市街地たるスプロール地区に焦点をしばり、街路名の生成について考えてみたい。

### Ⅲ 商業集積と街路名の生成

#### (1) 「上町小」から「公設市場」へ

上記Ⅱで概説したように、戦後那覇における中心市街地の形成は、旧真和志村域を含む、開南・神里原・壺屋・牧志にはじまる。なかでも特筆すべきは、1947年に一部の土地が開放されたため、後に「上町小」と称される<sup>うえまちぐわー</sup>ところとなる闇市場が、開南の高台に「自然発生」したことであろう。近郊農村の野菜、糸満の魚介類、そして米軍基地の「戦果」、さらには与那国や奄美諸島を経由して沖縄島内に持ち込まれた闇物資など、戦後のごく限られた流通の結節点として、統治空間の隙間を縫うように「上町小」が登場してきたのである。

しかしながら、衛生上の問題、そして何よりも「闇」の物資が取り引きされていたことから、軍政府の指導（横やり）が入り、那覇市や警察の方針とも絡んで、市場は戦前には見向きもされなかったガープ川の低地へと移動を強いられた。ガープ川左岸の土地区画に縄を張って区割りし、テント小屋（バラック）が設営されたという。これは、地主が疎開している不在時に、行政が土地を割り当てることで実現した。こうして1948年4月、事実上の公設市場として、現在にまでつらなる市場の歴史が幕を開けたのである。

その後、1950年に食料品市場、翌1951年にはガープ川を挟んだ東側に雑貨・衣料の市場が「セメント瓦」葺で建設される。大宜味朝徳編『沖縄商工名鑑 1956年版』（沖縄興信所、1956年、125頁）の「市場マーケット」によると、「那覇市公設市場」では、雑貨（204）、衣料（241）、食糧（40）、米穀（64）、鮮魚（25）、精肉（107）、鰹節（18）、野菜（20）の計719名が27棟の建物（計670坪）で営業していた。「業況」として、「創立六年を迎え〔、〕市民及全住民の生活必需品を提供し、其存在は市民生活に浸透し、常時一万人の業者と其利用者に依って活況を呈し、一面琉球の名物ともなっている」と説明されていることから、移転後の市場は、地元はもとより、島全体の住民を消費者とするほどに発展していたことがわかる。

注目されるのは、この「上町小」から牧志への市場の移転・新築をきっかけに、ガープ川周辺の低地部で急速に商業集積が進んだことである。旧来の道路には次々と商店が建ち並び、瞬く間に商店街を形成したのだった。

## （2）1950年代前半の商業集積と商店街の成立

第1表は、『沖縄商工名鑑』における1951年版「商店街案内」ならびに1953年版「那覇商店街案内」から、すべての商店街を一覧化したものである。両年を比較すると、1953年には数も増えて、商業地が拡散している様子を見て取ることができる。ただし、なかには名称の変更や空間的な分化も含まれるので、地理的な文脈に配慮しつつ個別に検討しておくことにしたい。

1951年		1953年	
国際通り	93	国際通り会	93
市役所前通り	30	桜坂通り会	51
市場通り	23	平和通り	81
市場本通り	29	西市場中央通り	20
市場中通り	14	市場中央通り	13
新栄橋通り	59	銀座通り団	18
世界館通り	18	新生通り会	36
千歳大通り	56	世界館通り	18
栄橋通り	18	栄橋通り会	36
樋川大通り	26	エビス通り会	23
開南大通り	10	沖映通り	44
崇元寺大通り	29	中央市場通り会	20
神里原商店街	94	千歳橋通り会	60
		壺屋通り	21
		樋川通り会	66
		神里原通り	36
		姫百合橋通り	35

### 「神里原商店街」

昭和8（1933）年に牧志街道として開発された国際通りをはじめ、樋川大通り（二中前～開南）・開南大通り<sup>1</sup>・崇元寺大通り・壺屋通り・姫百合橋通り（現・ひめゆり通り）など、旧市街地の外郭に位置する道路に沿って、各種商店の集積していることがわかる。そのなかにあって、ひとり「商店街」を冠されているのが「神里原商店街」であった<sup>2</sup>。神里原については、別のところで詳細に論じたように（加藤政洋『那覇 戦後の都市復興と歓楽街』）、戦後の那覇で計画的に開発された最初の商店街であり、国際通りが目抜き通りに成長する間の中心地であったことから、あえて「商店街」と表記されたのだろう。

<sup>1</sup> 開南通りに関しては、次のような指摘がある。「開南交番を境に与儀試験場に出る道路が今では幅員五間の開南通りである。戦後、沖縄刑務所裏の傾斜地と開南校裏、神里原の一部に受入れられた那覇の住民たちは、惨めな天幕小屋から出発してたくましい建設魂をみせ、次々と街づくりをして現在の繁華街となった」（『琉球新報』1955年12月12日夕刊）。

<sup>2</sup> 1953年の「銀座通り団」は未詳であるものの、1950年6月に、神里原の琉球映画劇場（同年9月に「大洋劇場」に改称）近傍に「銀座マート」が開設されていることから、これにちなむ商店街であったとも考えられる。たとえば、「バー千扇」の新聞広告には「神里原銀座通り」とある（『琉球新報』1952年8月7日）。

### 「市役所前通り」と桜坂

ここで、ひとつ注意を要するのが「市役所前通り」であろうか。当時の市役所は、牧志3丁目の希望ヶ丘公園東側に位置していた。市役所の跡地に映画館のグランドオリオンが立地したことから、現在ではグランドオリオン通りと呼ばれる当の街路が、1950年代前半の市役所前通りということになる。

その後、1951年に平和通り側から道路が開削され、1952年には丘の上に劇場「珊瑚座」(現・桜坂シネコン)が開館した。周囲には飲食店が集積し、那覇を代表する社交街《桜坂》へと発展する。桜坂の街路は、平和通りから丘の上を部分的に切り通して「平良歯科医院」の角で市役所前通り(現・グランドオリオン通り)に接続されたことから、事業所の集積が進んでいた市役所前通り一帯と連担し、一体的な商業地として、桜坂通り会が組織されたのである。

### 「世界館通り」

国際通りや沖映通りと同様、映画館に由来する「世界館通り」も、現在では聞き慣れない名称かもしれない。浮島通りが国際通りに交差する東側、現ローソン国際通松尾店の位置にはかつて松尾交番があり、その少し安里側に立地していたのが世界館であった。この映画館一帯の牧志街道を指して、おそらくはガープ橋(むつみ橋)～浮島通り間を「世界館通り」と称したのである。

### 「市場通り」から「平和通り」へ

すでに述べた通り、1950年代前半を通じて、市場の周辺やその近傍の道路に商店の立地が進み、複数の商店街が形成されるにいたった(第3図)。1951年の「市場通り・市場本通り・市場中通り・新栄橋通り・千歳大通り・栄橋通り」、そして1953年の「平和通り・西市場中央通り・市場中央通り・新生通り会・栄橋通り会・エビス通り会・千歳橋通り会」がそれに当たると考えられるのだが、現在とは名称が異なっていたり、あるいは当時の名称が消滅していたりするなど、これらすべての位置関係を比定することは難しい。



第3図



たとえば、現在「平和通り」として知られる商店街は、もとは「市場通り」と呼ばれていた。また、1951年の「市場本通り」に記載された店舗が、1953年の「平和通り」に含まれていることから、おそらく栄橋を境にして、国際通り側が「市場通り」、壺屋側が「市場本通り」だったものと思われる。「戦前すててかえりみられなかつたガブー川流域の低湿地一帯に自然発生的に出来た那覇市最大の繁華街市場通り」（『うるま新報』1951年8月4日）というように、「那覇市最大の繁華街」、それが1950年代初頭の「市場通り」だったのである。この描写では「自然発生的」に形成されたとあるが、実際には住民たちの積極的な取り組みがあったようだ（『琉球新報』1955年12月1日）。

すなわち、1947年末から1948年にかけて、佐久川長吉（1954年立法院議員総選挙で当選）らが音頭を取り、集客（「人寄せ」）を目的とする魚市場を開設した。さらに、具志幸得、国吉良健、友寄隆賀、国吉大昌、森田孟真、比嘉良雄らが協議の上、波の上から砂や石を運んで、「付近にあつた一トン爆弾痕の穴」や「沼沢地」を埋め立てて整地した。そこに、「上町小」の市場商人たちが大挙して移動してきたため、「この通りの発展を目指して、誰いともなくつけられた名称が『市場通り』」だったのである。

1948年、通り会の初代会長に発起人のひとりであった友寄隆賀が就任し、那覇市が本腰を入れて道路の改良工事に着手する。翌1949年には国吉良雄が会長となり、通り会をブロック別に組織化する那覇商業組合を結成した。1950年には森田孟真（1955年10月第4回那覇市議会議員再選挙で当選）が会長となり、「防犯と商業発展」を目的に街灯を設置、1951年には佐久田猛雄が会長となって、那覇市からアスファルト資材の供給を受け、通り会が受益負担金60万円を拠出して道路の舗装工事が実施された。1952年には森田孟真が再登板し、第一回商工祭を前に「平和通り」への改称を決定したのである。爾来、この名は那覇を代表する商店街名＝街路名として人口に膾炙し、旧称は忘却された。

### 「千歳橋通り」から「浮島通り」へ

次いで、「千歳大通り／千歳橋通り会」についてみよう。**第3図**からも明らかなおおり、この商店街名＝街路名の由来は、現・浮島通りとカーブ川の交点にあった「千歳橋」である。また1950年代を通じて、現在の名称として定着している「浮島通り」も併用されていた。後者の名は、この通りに立地していたホテルから来たものである。その浮島ホテルの開業は、「清楚な座敷で気安くやすめる ホテル 浮島 那覇市市場南通り」という新聞広告にもあるとおり（『うるま新報』1948年12月10日）、いまだ千歳橋通りという名称すら存在しない、1948年10月のことであった（『うるま新報』1948年10月28日）。

千歳橋通りといえばひところ浮島通りまたはトマチ（鶏市）で名の売れたところ。街にはまだ天幕小屋がゴテゴテと並んでいたころ泥沼地帯をひらいて戦後、那覇で最初のホテル浮島が建ち、鶏やアヒル、犬、猫の家畜市場が生れた。従つて通りの発展も西は浮島から、東はトイマチから次第にのび今日のゆるがぬ繁栄を築いている。（『琉球新報』1955年12月10日夕刊）

旧道であった千歳橋通りには、企業活動の自由化した1949年を境にして、浮島ホテルの立地した国際通り側、そして千歳橋周辺で商店や事業所の集積が進んだ。結果的に、橋

の名にちなむ街路名が定着したようだ。

「千歳の名は浮島通りの異名とともにその名は古い……」とされているとおり、少なくとも 1950 年代は「千歳橋通り」が主たる通称となっていたが、その後、浮島通りの名に押されて、またガープ川の暗渠化にともなう橋の消滅によって、最終的には浮島通りが定着したものと考えられる。1959 年版の『沖縄商工案内』における「那覇地区商工案内」では「千歳橋通り」と表記されるものの、1972 年 3 月 17 日発行の「那覇市全図」（1,2000 分の 1、人文社）になると、浮島ホテルの立地とともに、街路名としても「浮島通り」が示されていることから、復帰当時、すでに「千歳橋通り」は消滅していたことになる。

## 公設市場周辺の商店街名

1951 年ならびに 1953 年の商店街案内には、既出の分を除けば、市場中通り・西市場中央通り・市場中央通り・中央市場通りと、似て非なる商店街名がならんでいる。これらの位置関係を比定することは難しいのだが、「その名は市場中通り」と題された次の記事を参照してみよう（『琉球新報』1955 年 12 月 14 日夕刊）。

牧志通りと呼ばれる那覇市のメイン・ストリートにかかるガープ川の“むつみ”橋の、橋ぎわを折れて平和通りとへい行して並ぶその通りが“市場なか通り”である。“通り”は栄橋で中央市場通りにつながる。平和通りを表とすればここは裏であり、その通りには裏町の庶民の哀歓がそこはかたなく流れる。

この描写から明らかとなるのは、現在の「市場本通り」が市場中通り、同じく「市場中央通り」が中央市場通りだったことである<sup>3</sup>。1953 年の商店街案内からは市場中通りが落ちているが、店舗名から推察するに、(当時の)市場中央通りが市場中通りに相当するものと思われる<sup>4</sup>。

ガープ川に沿って連続する商店街は、市場通り（＝平和通り）とほぼ同時期に形成されたようだ。すなわち、「終戦後二年目にか、ガープ川の川底をさらった土が川沿いの場所を埋立てると、人が通り、車が往き、それではとバラックが建ち店通りになり、通り会が生れた」という（『琉球新報』1955 年 12 月 14 日夕刊）。しかしながら、「ガープ川の川沿いに、川底から危なげな、柱というよりクイで支えられたバラック屋台がズラツと並んでいる。道路をはさんでその向い側も、店、結構一つの“通”である」とも描写されるように、この商店街は後に「水上店舗」として問題化する建造環境であった。当時すでに、那覇市の都市計画で、ガープ川を暗渠にして現・ひめゆり通りへと抜ける幅 12 間の道路が開設されることになっており、通り会の会長であった宜保為楷（1953 年 3 月の那覇市議会議員補充選挙で当選）は、「簡単にはいくまい、私の通りだけでも百名、栄橋、那覇劇場の

<sup>3</sup> ただし、神里原の大洋劇場付近は「中央通り」とか「中央市場通り」などと呼ばれていたため、神里原内の中心商店街を指していた可能性もある（『うるま新報』1951 年 3 月 5 日「よろず」の広告）。

<sup>4</sup> 1953 年の商店街案内「西市場中央通り」には、「道頓堀旅館」が含まれている。1951 年 4 月に「簡易宿 道頓堀」の開業広告が打たれており（『琉球新報』1951 年 4 月 5 日など）、「那覇市新市場通り（トーフ市場小雨）」とある。略地図から判断すると、公設市場の南側、中央市場通りの近傍に位置していたものと考えられる。

通りで四、五百人の商売人、その家族を合わせて四千五百人ほどの立ち退き者の生活をどう補償するかだ」とのコメントを寄せていた<sup>5</sup>。

## 栄橋通りと新生通り

市場通り（平和通り）から栄橋へ通ずる道は早くから開かれていたようで、市場中通りを横切り、肉市場の北側を抜けて千歳橋通りへと緩やかな弧を描く道路、それが栄橋通りである（『琉球新報』1955年12月9日夕刊）。この通りは、米軍作成4,800分の1地形図にもはっきりと描かれていることから、千歳橋通りなどと同様、旧道であると言ってよい。千歳橋通りから肉市場への物資搬入路となっていたため、当初は商業の集積も進んでいなかったが、松尾地区の買い物先として発展したようだ。1953年の商店街案内には、現在も営業をつづける、かまぼこ屋「ジランバヤ」の名前も見られた。

他方、1951年にはなかった商店街のひとつに、新生通りがある。

通り前交番（平和通り）横から栄橋をわたり栄橋通りへ出るとすぐ公設の肉市場前に来る、その肉市場のすぐわきを千歳橋通り（浮島通り）へ抜ける通りが、幅員三間、長さ六十間の「新生通り」である。「新生通り」という名前の示す如く、この通りは商店街としては正に新しく生れた通りである。つまり他の通りに比して最も新しい通りといえるのである。そして新生通りの特徴は、那覇市の台所である公設市場と不離一体の状態にあることで、従って通り商店の取扱い商品は食糧品一点張りとなっている。公設市場がまだ不完全な建物のころ、この通りは通りなどといわれるようなものでなく、横丁、いや路地といった方がピッタリする抜け道程度のもので雨でも降ると、それこそドロドロのどろんこ道に早変わりする状態にあつた。

この路地が市場を横に控え、開南、神里原、与儀方面から市場へ抜ける近道となつている地の利に目をつけた商人達がぞくぞくここに入り込み、五三年三月には通り会が結成……。『琉球新報』1955年12月13日夕刊)

1953年3月に通り会が結成され、同年中に幅員二間の道路を舗装、1955年11月には一間分を拡幅して、街路・商店街としての体裁を整えていった。旧道を基盤とする周辺の商店街とは異なり、ここは戦後開発型の――まさに「新生」と呼ぶにふさわしい――商店街ということになる。

## 開南と新栄通り

開南における「上町小」の発生を踏まえて語られるのが、新栄（橋）通りの歴史である。

那覇市開南交番から壺屋に出る下り坂の通りが、新栄橋通りである。那覇市の新市街がまだ街らしい形をつくらぬ一九四七年ごろ、国場、与儀、古波倉、仲井間辺りの農家から野菜ものを持出して売りに出たの〔が〕現在の開南交番付近であつた。通り会では

<sup>5</sup> 「水上店舗」の問題については、加藤政洋「都市水害と建造環境の改変――戦後那覇におけるガープ川「水上店舗」をめぐる――」（吉越昭久編『災害の地理学』文理閣、2014年、118-136頁）を参照。



〔、〕これらの物売りや物々交換をする人たちが通行の邪魔にならないように一カ所に集めて商売をさせていたが〔、〕次第に食料品や食油、豆腐、島産品の下駄、GI服を改造した服などが出るようになり、また日本帰りの人たちの目新しい日本商品や、ビール罐でつくったブリキ製品も出回るようになったので、場所がせまく、これを中央通りに移したが、現在的那覇市場の発祥の地としてのこの十年の歴史は余り知られていない。

（『琉球新報』1955年12月11日夕刊）

この記述だけを読むと、「上町小」に先行して、新栄（橋）通りの商店街が形成されていたことになる。事実、通り会の結成は市内で最も古く、1947年1月の時点で、すでに「天幕小屋やトタンぶきなど含めた八十戸の店があつた」のだという。「通りが商店街らしい形態を整えた」とされる1947年中に、「通り会の発展」を目的として「自転車をはじめ車馬の通行禁止を申請し〔、〕現在〔1955年12月〕も自転車のほかは通行禁止」であった。さらに、1948年10月前後に、戦後那覇で最初の「自警団を組織して〔、〕通り周辺の治安維持につとめ」たという。1947年の通り会結成以来、9年間にわたり会長を務め、街づくりの先頭に立っていたのが、仲井真元楷（1948年2月第1回那覇市議会議員選挙で当選）である。

1950年代前半は、開南の交番から新栄橋までの店舗は安定的に営業していたものの、新栄橋から丸国マーケット<sup>6</sup>の位置する千歳橋通り／神里原の十字路に出る方面は、店舗の入れ替わりが激しく、一時的にパチンコ屋が集積したこともあった。また、開南がバス交通網の結節点となったことで、新栄通りの集客力は格段に高まったようだ。

### （3）商業集積と街路名の生成

1950年代前半の旧那覇市とその周辺における商業集積は、開南の「上町小」がガープ川沿いの低湿地帯へと移設されたことに端を発している。この公設市場を核として、周辺の旧来の道路には瞬く間に商店が建ち並んでいった。商業集積の過程で、個々の店舗は限られた地理情報を取り合わせることで、既存の施設や街路との位置関係を示し、自らの立地を広告しなければならなかった。店舗の位置を説明する広告には、おのずと無名の街路にわかりやすく名称を付与する実践がともなわれてゆくのである。

さらに列状の商業建造環境の形成は、特定の領域を「商店街」として組織化する気運を確実に盛り上げていった。商店街（商店会——通り会や通り団などとも呼ばれた——）の結成には、地理的かつ社会的な象徴となる名称が必須である。結果として、急激な商業集積は、「にわか仕立て」の名称を冠した商店街名＝街路名を次々と生み出すこととなった。そうであるがゆえに、商店街名＝街路名は単純な地理的素材に由来することが多いのである。

### 市場周辺の街路名

<sup>6</sup> 新栄（橋）通りと浮島通りの交差点に立地する丸国マーケットは、1950年4月15日に開業している。当初、新聞広告には「那覇市市場前」ないし「那覇市市場東並木通り」とあった（『うるま新報』1950年4月8日・23日）。現在も、旧丸国マーケットから神里原方面に抜ける街路には「並木」がある。

まず、公設市場周辺の商店街名＝街路名の特徴は、すでに見たとおり、「市場」を冠する名称の多いことであった。平和通りの旧称は「市場通り」——それにくわえて、おそらく「市場本通り」——であるし、むつみ橋から公設市場に延びる商店街名＝街路名は、「市場中通り」や「中央市場通り」であった。ちなみに、現在は「市場中通り」が「市場本通り」、「中央市場通り」が「市場中央通り」となっている。

この点について、「市場中央通り」を構成するガープ川中央商店街組合でお話をうかがったところ、看板を設置する際、製作した業者が「中央市場通り」とすべきところを、誤って「市場中央通り」としてしまい、仕方なく組合としてそのままにしたのだという。戦後の困難を乗り越えたからこそ、鷹揚な判断であったと言えるだろうか。

いずれにせよ、市場を中心とした消費空間のありようが、街路名にも色濃く反映されているわけだ。

### 橋に由来する街路名

旧道を軸線として形成された商店街には、ガープ川の橋に由来する名称が定着したことも、その大きな特徴であった。最初に成立したのは、開南の高台からガープ川の低地へと延びる旧道が商店街化した、「新栄橋通り」である。現在、商店街名は「サンライズなは通り」となっているが、それ以前は「新栄通り」と呼ばれていた。橋に由来する街路名でありながら、「橋」が脱落してしまったわけだ。水上店舗の建設にともない水路が暗渠化して、川のない橋となったことも原因しているのだろう。ちなみに、「サンライズなは通り」と旧新栄橋で交差している「大（太）平通り」——水上店舗の第四街区 A から構成される商店街——も、橋にちなんだ名称である。

「千歳橋通り」ならびに「栄橋通り」もまた、読んで字のごとく、橋名に由来した街路／商店街である。だが現在、「千歳橋通り」は「浮島通り」に取って代われ、「栄橋通り」も街路名として用いられることはない。

ここで少しばかり周辺に目を配ると、ほかにも橋に由来する地名を拾うことができる。たとえば、「ひめゆり通り」は安里川にかかる「姫百合橋」にちなんで、1950年代には「姫百合橋通り」と呼ばれていた。また、現在では「国際通り」に一括されているものの、安里川の蔡温橋以東は、かつて「蔡温橋通り」と称される商店街であった。

新しいところでは、水上店舗の東側に組織された「むつみ橋通り商店街」を挙げることができるだろう。牧志街道に架かる「ガープ橋」は、1954年の新築工事に合わせて「首都にふさわしい名前」に改称すべく公募され、那覇市歌の一節「むつみしたしむわが那覇市……」にちなんだ応募作「むつみ橋」が選定された（『市民の友』1954年6月15日）。景観上は、「川」も「橋」もない「むつみ橋」交差点であるが、その名は確かに場所の記憶を刻んでいる。

### ランドマークとしての商業施設

市場も橋も人工的な建造物（施設）であることを考えるならば、わたしたちは戦後那覇における地名の起こりに関して、直截的な祖型をすぐに思い浮かべることができるかもしれない。というのも、那覇の目抜き通りである「国際通り」が、アーニーパイル国際劇場に由来していることは、あまりに有名だからである。ここでは、劇場（映画館）をはじめ、

商業施設に由来する地名について、いくつかの例を挙げてみたい。

国際通りに関しては、大濱聡『沖縄・国際通り物語——「奇跡」と呼ばれた一マイル——』（ゆい出版、1998年）に詳しいが、街路名の生成という観点から少しばかり補足しておくことにしたい。昭和戦前期に県道として開発されていた牧志街道は、戦後1950年、「民営バスの発足と共に那覇市の都心部を貫く一大幹線」として、交通の大動脈となり、商業活動に拍車がかかる。

国際劇場が四八年に掘立小屋のような小屋から出発して間もなく平和館、国際劇場が本建築の映画館となり、大宝館が出来、バスの発着所が各所に出来るころの牧志通りは人家、商店が軒を並べる商店街として発展していった。こうした中で続々と高層建築が立ち並び、市の代表的な通りとして面目を一新するころ、牧志通りはいつの間にか国際通りと呼ばれ、文字どおり内外の客が入り乱れる国際的色彩の濃ゆい街路として発展したのは〔、〕基地沖縄の首都として当然といえよう。（『琉球新報』1955年12月2日夕刊）

この記事では、国際性が謳われているが、地名の起源それ自体は、やはり「国際劇場」に求められなければなるまい。ただし、当時の「国際通り」は、むつみ橋から蔡温橋までの区間を指していた。先述したとおり、蔡温橋から安里までは「蔡温橋通り」と称される、旧市街地で計画的に開発される若松に先行した卸問屋街であった（『琉球新報』1955年12月3日夕刊）。逆に、むつみ橋を境とする西側（現・県庁側）には、通りの名がついておらず、「俗称松尾通り」、あるいは「旧世界館のあるところは世界館通り、そして現在は国映通りともいつており、またむつみ橋通りという人もいる」など、確たる名称は存在しなかったのである。

蔡温橋通りが卸商店街、国際通りが小売商店街、そしてむつみ橋以西が商店とオフィスの入り混じった街区というように、機能的には空間分化していたわけであるが、「特殊な性格を帯びた大通りとして発展する可能性をおびている」がゆえに、「早く通り会を結成して通り名を決め」ることが求められていた（『琉球新報』1955年12月4日夕刊）。ついでに言えば、世界館より西側も、当時はまだ「名なし」の通りだったのである（『琉球新報』1955年12月5日夕刊）。

アーニーパイル国際劇場の街路名化という先駆的事例は、戦後那覇の都市形成期における街路名の生成に、おおきく影響を及ぼした。世界館の立地（1950年）にともない、現・国際通りの一部が「世界館通り」となり、世界館の跡地に国映館が建設されると、必ずしも人口に膾炙したわけではなかったにせよ、一部に「国映館通り」という名称が用いられたことなどは、その証左となるだろう。

同じく、ガープ川右岸に立地した沖映本館（1947年）もまた、1950年代の初頭には「沖映通り」の名を生み出した。このほかにも、旧真和志役所の近傍に立地した「あけぼの劇場」に由来する「あけぼの通り」などの例を挙げることもできる。

商業施設の名称が街路名ないし商店街名として定着した例は、映画館に限られたわけではない。世界館前の国際通りを北へ入り、200mほど進んで右折し、沖映通りに抜ける街路は、1949年5月に開店した「レストラン・ニュー・パラダイス」（『うるま新報』1949年5月2日）に由来する「ニューパラダイス通り」である。同様に、「浮島ホテル」に由来する



「浮島通り」も、千歳橋通りに代わって定着した。同ホテルは1948年10月の開業であるから、スムーズに街路名として定着したわけではないにせよ、国際劇場／国際通りやレストラン・ニュー・パラダイス／ニューパラダイス通りと並ぶ、先駆的な事例である。

以上のように、特定の商業施設が街路名として定着していったのは、それらが戦後那覇の都市形成（復興）期におけるランドマークとしての役割を果たしていたからにはほかならない。とりわけても映画館は、当時の市街地にあってはひととき目をひく大規模な建築であったし、娯楽の中心として多くの人を集め、そして人びとの心に笑いや潤いをもたらす存在であったはずだ。

### （補説）区画整理と町名変更

那覇市の土地区画整理事業は、都市計画への機運の高まり、そして米軍の接收した土地が段階的に開放されるに及び、1953年から実施された。旧市街地の事業は、戦災復興土地区画整理事業として、美栄橋地区（11.8 畝）と那覇第一地区（222.9 畝）とに区分され、前者は1953年10月、後者は1954年5月に区域の決定をみた。

どちらも1960年に工事を終えたものの、換地処分の正式な決定は1971年まで待たねばならない。そのため、工事の終了に合わせて計画されていた町名変更も棚上げにされたまま、数年の歳月が流れる。

1969年9月、那覇市は、以下のような理由から、ようやくにして町界・町名の整理統合を決め、作業に着手した。

那覇市は戦後、みなと村、首里市、小禄村、真和志村などを吸収合併し、全琉人口の三分の一に当たる三十万の大都市に発展したが、近代都市としての都計〔都市計画〕は遅々として進んでいない。そのうえ合併当時の各市村の町界や町名をそのまま引きついだため、現在なんと町名が八十二、小字三百四十一と町界町名地番が大混乱、末端行政面だけでなく、市民生活にも大きな不便をおよぼしている。こうした混乱を抜本的に解消するため、那覇市町界町名整理審議委員会（山里永吉会長）は、これまでの地番による住居表示方式を改め、本土で実施されている「住居表示にかんする法律」に準じて、住居番号方式を採用、コマ切れ町界を合併するなど、新しい町界町名の設定をめざして作業を進めている。（『琉球新報』1969年9月9日）

1950年8月にみなと村を、1954年9月に首里市と小禄村を、そして1957年12月に真和志市をそれぞれ吸収合併してきた那覇市は、このときまで町界・町名の整理にいっさい手をつけてこなかった。そのため、82の町名と341の小字名、あわせて423の「コマ切れ町名字名が入り乱れ、同一町名やまぎらわしい町名をはじめ、旧真和志市や旧小禄村の場合は、字名がそのまま残るなど、大混乱」をきたしていたのである。

前述のとおり、1960年6月に区画整理事業の完了をもって町界・町名の変更が市議会で議決されていたのだが、換地処分が政府の承認を得られず、そのまま放置されていたという。

平良市政のもと、ようやくにして整理統合に向けた作業が再開されたわけであるが、今度はそれによって「ゆかりの辻町が消えて久米四丁目」となるなどの、歴史的な町名の存

廃をめぐり、地域住民からの異議申し立てが起こった（第3図）。なかでも、「旧那覇四町として知られる若狭、西、東、泉崎のゆかりある地名は残すべきだ」という意見が強かったという（『琉球新報』1969年9月10日）。

審議会では、こうした「ゆかりの町名が消える」ところの住民感情への配慮もあってか、「議論百出、市当局案が大幅に修正される」にいたる（『琉球新報』1969年9月11日）。

たとえば、市当局の案では泊一丁目・泊二丁目・泊新町となっていたところを、それぞれ前島一丁目・前島二丁目・前島三丁目、崇元寺町を泊一丁目、高橋町を泊二丁目、泊港北岸を泊三丁目に変更したほか、「元町」としてまとめられた旧市街地の東町・西本町・西新町の三町は、港湾道路を挟んで東側を東町、西側を西町とすることで落ち着いた。

しかしながら、久米四丁目と久米二丁目への変更がそれぞれ提示された辻町と天妃町・上之蔵町については、結論を見るにいたっていない。

というのも、「辻町」という町名の存廃をめぐり、審議会が荒れに荒れたからである。

市側——「辻町のイメージは暗く、決して誇れる歴史的な名称とはいえない。しかもいまではすっかり昔のイメージとは変わった米人相手のバーが立ち並び、全くよそ者の町になったので「辻」の名称は変えるべきだ」

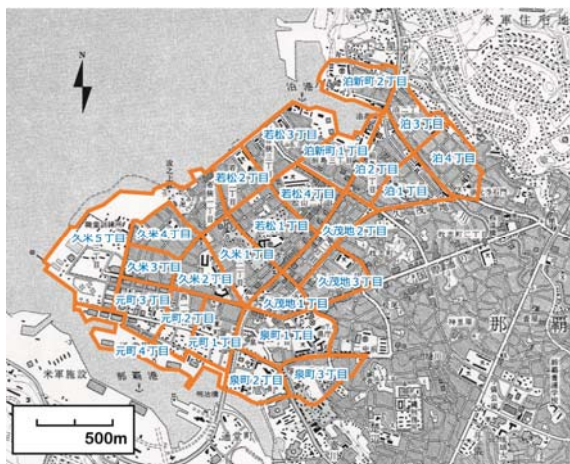
存続派の市民——「なにをいうか。昔の辻はよかった。それに最近は観光誘致のためにジュリウマ行列も盛んになりつつある。辻の名を廃止するのは絶対反対だ」

（『琉球新報』1969年9月11日）

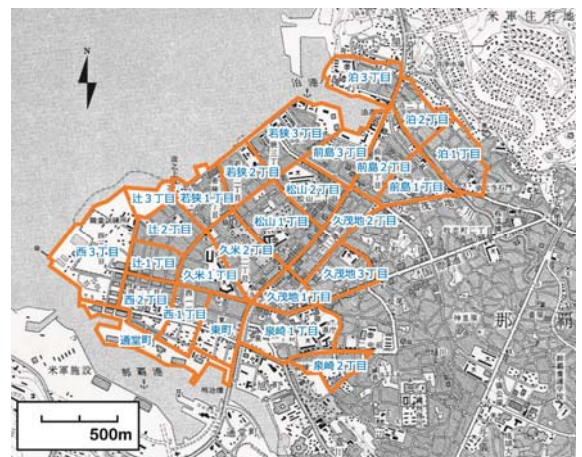
このように、「辻町」の改称をめぐる問題は、特殊な遊廓として栄えた古きよき《辻》を知る者たちと、変貌した景観を目の当たりにする者たちとの「辻町のイメージに対する世代の断層を浮き彫りにした格好」となった。

「市から諮問を受けたとき、歴史というものは生活のうえで大切なものなので、ぜひ名称を残しておくべきだと答申しました」という、ある地元代表者の言葉に示されるごとく、地名論争それ自体が、場所にまつわるアイデンティティの重要性を物語っている。

この一連の騒動の顛末は、1971年11月15日、旧市街地の全域をカバーする戦災復興土地区画整理事業（那覇第一地区）の換地処分が確定されたことを受けて、第4図のように決定した。崇元寺・天妃・美栄橋・西本町などの町名が消えた一方、「辻町」は残された。



第4図



第5図

#### IV おわりに～「都市は街路名によって言葉の宇宙となる」～

2006年の夏、那覇市内の市場と商店街をひと通り素見した筆者は、ひめゆり通りの神原の交差点から、三原方面へと向かっていた。ふと電柱を見上げると、そこには真新しい看板が設置され、「壺宮通り」という聞き慣れない街路名が表記されている。調べてみると、2005年4月11日に市道壺屋南線の名称として「壺宮通り」が採用され、あわせて通り会の発会式も行なわれていた。

壺宮通りは、ひめゆり通り以東で、ちょうど壺屋と寄宮の境界に位置していることから、それぞれ一字ずつ「壺」と「宮」とを取り合わせて名付けられたのだろう。この通りは、新たに開発された道路というわけではなく、戦後すぐに米軍が作製した地形図にも登場することから、古くから存在している街路である。興味が持たれるのはまさにこの点で、終戦から60年の歳月を経て、「壺宮通り」と命名されたのだ。

ここで想起されるのが、ドイツ人思想家ヴァルター・ベンヤミンの述べた「街路に名前をつけることには独特の悦びがある」という言葉である。ふりかえってみると、戦後に都市化した那覇の市街地には、その街区の成り立ちをも喚起させる、じつに個性豊かな名称が街路に付けられていた。たとえば、「天ぷら坂」といった地元の人しか知らないような固有名の存在にふれてみると、都市形成の歴史地理と地名の関係性を問わずにはおれない。

戦後那覇の都市化過程は、大規模な地形改変と（主として農業から宅地への）土地利用の転換、そして独特の施設配置によって特徴づけられる。しかも上述のように、都市建設の舞台は旧市街地の郊外へと移り、まったく都市的な基盤がないところでスプロールしながら市街地化が進行したのだった。本研究では、この都市化の地理歴史的なコンテクストを踏まえつつ、その過程で発生した地名について、いくつかのタイプを抽出して生成の原理を明らかにしてきた。戦後都市形成の初期に登場した地名のなかには、定着することがないまま歴史の後景に退いたり、正式な命名によって消え去ったものも少なくない。

しかしながら、逆に由来となった映画館に代表される商業施設ないし川や橋といった地景が消えてなお、それらが街路名として生きつづけている、つまりその名に歴史を刻んでいる例も多々あるのである。ここであらためて、ベンヤミンが『パサージュ論』の「P パリの街路」の冒頭に置いた文章を引用しておこう。

パリは活動的な都市、つねに動いている都市として語られてきた。だが、この町において、都市構造が持つ生命力に劣らず重要なのは、街路や広場、あるいは劇場の名前にひそむ抑止しがたい力である。こうした名前はいくら場所が変化しても残り続ける。ルイ・フィリップの時代にはまだブルヴァール・デュ・タンブルに立ち並んでいたあの小劇場が次々と取り壊されてはあらためて他の街区に――市区という言葉を使うのは気が進まない――出現するということが何度あったろうか。数世紀前に街路ができたときの地主の名前が、今日でもまだ街路の名前として残っているケースがどれだけあるとか。「水の城」というもうとっくの昔になくなってしまった噴水の名前が、今日でもパリのあちこちの区に名残を留めている。有名な居酒屋でさえもそれなりのやり方で、市内におけるささやかな不滅性を確保してきた。ロシェ・ド・カンカル、ヴェフル、トロワ・フレール・プロヴァンソーのような文学史上不滅の酒場は言うまでもない。と



いうのもある名前が、たとえばヴェテルとカリシュといった名前が食通のあいだに浸透するやいなや、パリ中が郊外にいたるまで小ヴァテルや小リシュで溢れかえるのである。これが街路の動きであり、名前の動きである。そして、こうした名前はしばしばひどくひずんで互いにぶつかり合うのである。(ヴァルター・ベンヤミン著、今村仁司・三島憲一ほか訳『パサージュ論 第3巻』岩波現代文庫、2003年、[P1, 1])

かつて、そこにあった噴水の名前が街路名として残っているということ、それはとりもなおさずシニフィアン（記号表現——街路名やその言葉の響き）とシニフィエ（記号内容——意味内容、通りの光景や人びと、その建造環境など）が乖離したことを意味している。近年、通称であった地名の制度化（認定）や旧称の再認定が進められていることから明らかな通り、地名／街路名が場所アイデンティティの記憶装置として再評価されていることを考えるならば、市街地形成と地名の生成を考察することは、今後の〈まちづくり〉にも資する素材を提供できるだろうし、都市形成の歴史地理を「場所の記憶」という視座から捉え返す、オルタナティブな都市の空間誌も可能となるのではないだろうか。

「都市は街路名によって言葉の宇宙となる」(ベンヤミン 2003 [P3, 5])。